

第3章 今、求められる力を高めるための体制づくり

第1節 体制整備の4つの視点と校長のリーダーシップ

質の高い豊かな学習活動を推進し、児童の課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などを高めるためには、総合的な学習の時間に関する体制づくりが欠かせない。そして、その土台となるのが、校長のリーダーシップである。

校長のリーダーシップの下、全教職員が学級、学年の枠を超えた、実践研究や意見交換等を実施しながら、適切な指導計画を作成することとなる。また、指導計画を作成する際も、実施する際も、保護者や地域住民などとの連携が必要となり、ここにも校長のリーダーシップが必要となる。

各学校が、適切な指導計画に基づき、児童一人一人にとって、充実した総合的な学習の時間を実現するためには、以下に記した4つの視点を視野に入れた体制整備が重要となる。

体制整備のための4つの視点

校内組織の整備	授業時数の確保と弾力的な運用
<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童に対する指導体制 <ul style="list-style-type: none"> ・児童の学習集団に応じた指導体制の工夫 ○ 実践を支える運営体制 <ul style="list-style-type: none"> ・学習を円滑に推進する教師の適切な職務・役割の分担と「校内推進委員会」の充実 ・運営の中心となる「総合的な学習の時間コーディネーター」 ○ 校内研修等の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 年間授業時数の確保 ○ 目的に応じた単位時間等の弾力化 <ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態、指導内容のまとめり、学習活動等を考慮して、効果的な単位時間・時間割を設定 ○ 1年間を見通した授業時数の運用 <ul style="list-style-type: none"> ・各学校の創意工夫による年間指導計画等の編成 ・活動の特質に応じ夏季などの長期休業日の効果的な活用
学習環境の整備	外部との連携の構築
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習空間の確保 <ul style="list-style-type: none"> ・多様な学習形態に対応し、掲示等による児童の学習への関心等を高揚できる学習空間の確保 ○ 学校図書館の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館の学習・情報センターとしての機能の充実 ○ 情報環境の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・PC環境の充実と教師のICT活用指導力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の教育資源の積極的活用 <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な連携による協力的システムの構築 ・地域連携を推進する組織の設定と教師の配置 ・地域資源リストの充実と活用 ○ 総合的な学習の時間の成果の伝達 <ul style="list-style-type: none"> ・成果発表の場と機会の設定 ・学校と家庭・地域との信頼関係の構築 ○ 町の活性化に向けた児童による地域貢献

校長のリーダーシップの下に進める校内組織の整備・活性化



総合的な学習の時間にかかわるビジョンの明確化と教師との共有

第2節 組織整備の実践事例

各学校では、総合的な学習の時間の目標を達成できるように、全教職員が協力して全体計画及び年間指導計画、単元計画などを作成し、互いの専門性や特性を發揮し合って実践していく校内推進体制を整える必要がある。

この節では、児童に対する指導体制や実践を支える運営体制と教師のカリキュラム開発能力等を高めるための研究推進体制の主に2つの側面から、校内推進体制の実践事例を紹介する。

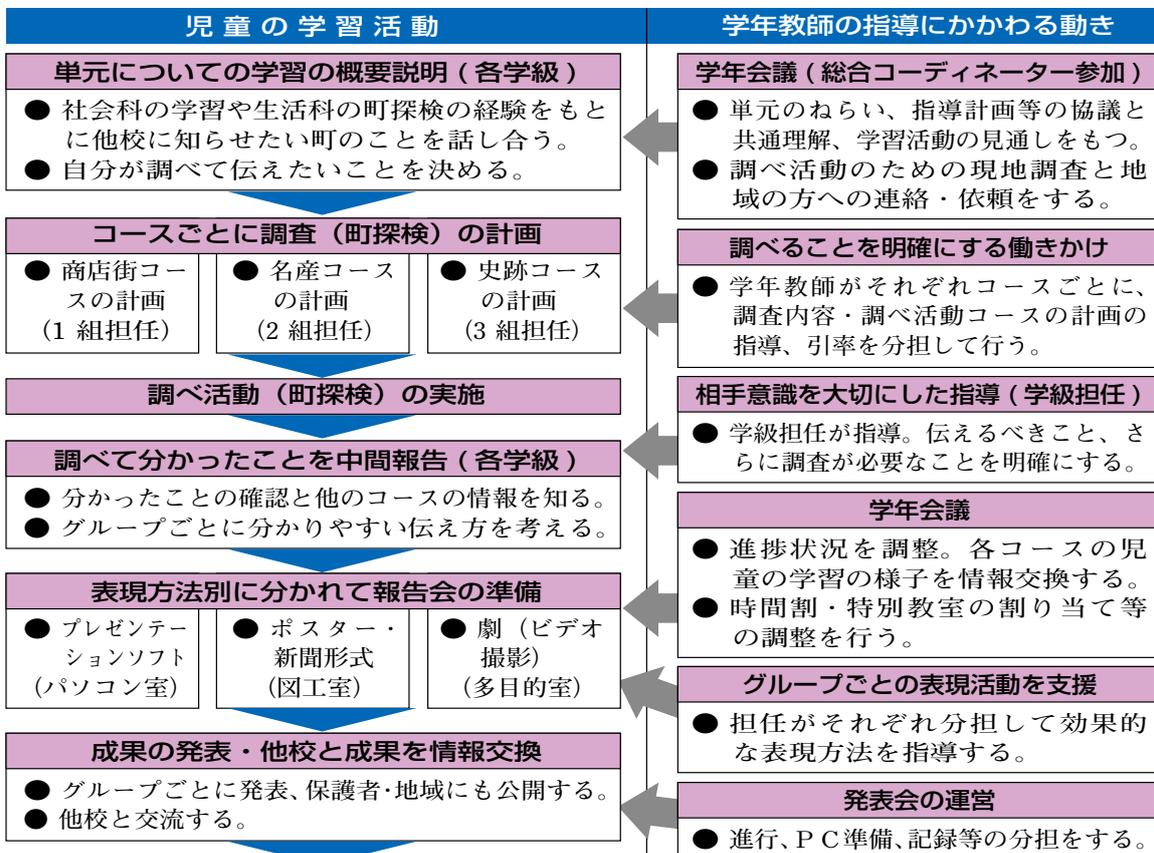
1. 指導体制と運営体制の整備

(1) 児童に対する指導体制

総合的な学習の時間の授業は、各学校で定められた目標や内容により、学級担任が自学級を直接指導するばかりではなく、学級枠を取り外して学習集団を組織し学年内の教師が指導を分担する指導体制や、学年枠も外して学習集団を構成し教師全体で指導を分担する指導体制などにより学習活動が行われることがよく見られる。ここでは、それらの実践事例を紹介する。

事例① 学年教師が学級枠を外した学習集団を分担して指導した例

A校は、1学年3学級編成の中規模校で、3年生は、年間指導計画に基づき、町の自慢を調べ他校の3年生と交流をする学習活動を実践しました。3人の担任が学級枠を外して、児童の興味関心により3つのテーマを設定した調べ活動と、表現方法別の発表の準備の指導を分担して行いました。



事例② 級外教師がT・Tに入り、学習集団を分担して指導した例

《B小学校の概要》

●児童数 322人 ●学級規模 12学級 ●教師数 20人 ●学区域の特色 都市部住宅地

B小学校の5年生は単学級であるため、活動当初は学級担任による指導を基本とします。その後、アイマスクや車椅子体験、地域の老人との交流等を通して児童の関心が高まり、活動が発展することが予想されるため、年度当初の話合いで、級外とのT・Tの指導体制をとるよう予め計画をしました。

体験後の児童の話合いで、「老人ホームとの交流」、「障害を持つ人との交流」、「地域にでて実際にお年寄りの声を聞く調査活動」へと学習が広がり、この時点でT・Tによる指導へと切り替えました。指導にあたっては、それぞれの計画の進捗状況や児童の気付きを情報交換すると共に、活動を深める指導の工夫についてできるだけ相談するよう心がけました。

<学習活動の概要>

アイマスク・車椅子体験、老人福祉施設訪問

新たな課題

- ・体の不自由な人ともっと交流したい。
- ・もう一度老人ホームのことを知りたい。
- ・町のお年寄りの話も聞いてみたい。

課題解決に向けた取組

《担任と級外教師で指導》

3グループに分かれて、交流計画を立てる

各施設・地域との交流 情報交換

- ・老人福祉施設
- ・肢体不自由者福祉施設
- ・地域の老人（病院や公園・公民館）

自分たちでできることを考え交流する

新たな課題

今、自分たちが地域の人のためにできることは何かについて話し合う。

事例③ 全教師が第3～6学年の縦割り班活動を協力して指導した例

《C小学校の概要》

●児童数 220名 ●学級規模 7学級 ●教師数 13名 ●学区域の特色 農村と住宅地が混在する地域

C小学校の周囲には水田が残り、地域の農家から田んぼを借りて全校で稲作体験を実施し、3年生から6年生の児童が育てた餅米で毎年発表会や餅つき大会を行っています。

総合的な学習の時間では、それぞれの稲作体験から、各学年で食育・環境・国際理解・地域をテーマとした学習活動へと発展させた取組を行っています。

稲作体験では、3～6年生の児童を縦割り班に編成し、それぞれ教師が、田植え・草取り等の世話・観察・稲刈りの活動を地域農家のボランティアの方と一緒に担当しています。

縦割り班による学習の流れ

4月	<ul style="list-style-type: none"> ■全教師による指導計画等の共通理解 ・総合的な学習の時間コーディネーター（以下コーディネーター）を中心に単元のねらい、内容、計画、指導体制等についての検討、共通理解を全教師により行う。
5月～9月	<ul style="list-style-type: none"> ■縦割り班の編成・顔合わせ。 ■縦割り班ごとに稲作体験を行う。 田植え～稲刈り ・各学年の総合的な学習の時間の活動につながる児童の気付き等、活動の様子を情報交換する。 ・総合掲示板に各班の体験の様子を掲示する。
10月	<ul style="list-style-type: none"> ■縦割り班ごとに脱穀・精米を体験 ■縦割り班ごとに体験をまとめ掲示する。
12月	<ul style="list-style-type: none"> ■全校の発表会 ・お世話になった農家の方を招待する。

事例④ 教師の特性や専門性を生かして進めた活動の実践例

《D小学校の概要》

●児童数 556人 ●学級規模 20学級 ●教師数 32人 ●学区域の特色 中都市部、校区に川

4年生は、地域を流れる川とかかわる活動から身近な環境について考える学習へと発展していく学習活動を計画し実践しています。学習の過程では、まず全員で川に出かけ、遊んだり気になることを調査したりして、川に親しみをもたせた後、昔の川の様子を知る地域の方や川を守る運動をしている方の話を聞き身近な環境の変化に気付かせ、自分たちの生活と身近な環境について考えることができるようにしました。各担任は校務分掌上担当する教科の専門性を活かして学級の枠を超えて児童への指導ができるよう指導体制を工夫するようにしました。また、校長は、日頃昆虫の研究を専門にしていることから、昆虫の生態や環境の変化の関係等についての指導に加わってもらうようにしました。

児童の学習活動

1 単元についてのガイダンス（各学級）

●川について知っていることや川で遊んだ経験を紹介し、川の様子を予想し、川で活動することに興味をもつ。

2 調べたいことをきめる

●学年全体で川で遊んだり植物や生き物を見つけたりする。
●各学級で、もっと川について調べたいこと・してみたいことを話し合う。

3 してみたいことのグループごとに活動する

●釣り、川遊び、草花採集、昆虫みつけ等、それぞれがしたいことをグループ毎に行う。

4 川の様子を調査し紹介する

●川に棲む生物・川原の植物や生物・川遊びの種類などを調べ、分かったことを紹介し合う。

5 地域の方から昔の川の様子・環境保全活動の話を知る

●昔の川の様子や変化したこと、環境を守る工夫やボランティア活動等の話を聞き、自分の調査と比較して新たな課題を整理する。

6 川の調査をする

●新たな課題により、水質・ゴミの量や種類などを調査する。

7 川の環境調査結果報告会をする

●各学級でグループごとに探究した内容について発表する。その際、保護者・地域人材等を招いて報告する。

8 自分たちの生活と環境について考える

●川の環境に関する調査活動をもとに、自分たちの身の回りの環境問題やこれからの生活について話し合う。

学年教師 A（1組学年主任）

・学年において本単元のカリキュラム開発・推進の中心
・国語主任～表現活動の技能を高めるため、発表方法の例示や発表原稿の書き方・話し方の指導を担当
・主に川での遊び方を指導する

学年教師 B（2組担任）

・算数主任～調査結果のまとめ方として、表やグラフによる効果的な示し方について指導する
・コーディネーターと連携し地域ボランティアとの連絡・打ち合わせを担当
・主に魚に関する指導を担当する

学年教師 C（3組担任）

・学校図書館担当・司書教諭～昔の川の様子や環境の変化についての調査に必要な資料など調べ学習の資料を公立図書館から集める
・総合コーナーの充実を図る

教師 D（理科専科）

・理科主任～生物・植物の種類や生態、水質検査の方法等、科学的な見方を示唆し、児童の探究活動を支援する

校長

・昆虫の種類や生態等について指導し、環境と昆虫の関係に目を向けられるように支援する

(2) 実践を支える運営体制

学校の多くの学習活動は、一人一人の教師が個別に行うのではなく、推進組織が立ち上げられ互いに連携して進められている。特に総合的な学習の時間では、横断的・総合的な学習が展開されるため、教師の専門性を生かした全教職員の協力による取組が求められる。そのため、指導方法や指導内容について、気軽に相談できる仕組みを設けておくことが大切になる。

校長は自分の学校の実態に応じて既存の組織を生かしつつ、新たな発想で運営のための組織を整備し、児童の学習活動を学校全体で支える仕組みを校内に整える必要がある。

事例① 小規模校の運営組織の例

● E校の教師の総合的な学習の時間にかかわる分掌内容

教職員	校務分掌	総合的な学習の時間についての分掌内容
a 教頭		運営体制の整備、校外の支援者。支援団体との渉外
b 主幹教諭	教務主任 ICT 担当	各種計画の作成と評価、時間割の調整、指導の分担と調整、情報機器等の整備及び配当
c 教諭	1 学年担任、 低学年代表	学年内の連絡・調整、研修、相談
d 教諭	3 学年担任、 中学年代表	校内の連絡・調整、研修、相談 ★総合的な学習の時間コーディネーター
e 教諭	5 学年担任 高学年代表 研究主任	学年内の連絡・調整、研修、相談 研究計画の立案、実施
f 教諭	児童指導 担当	学習活動時の安全確保、中学校との連携の推進
g 教諭	図書館担当 司書教諭	必要な図書の整備、児童の図書館活用支援
h 教諭	養護教諭	学習活動時の健康管理・健康教育にかかわること。食育にかかわること

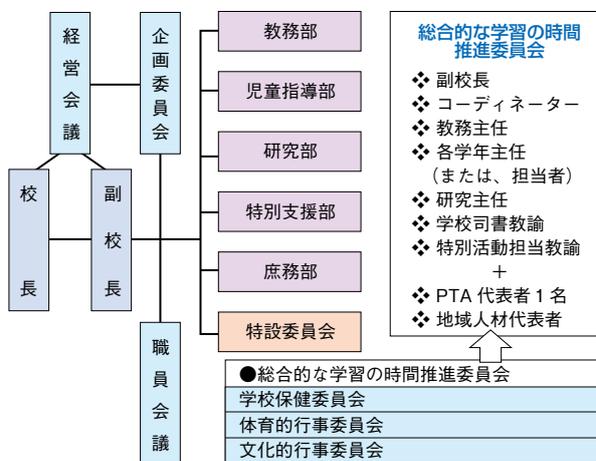
全学年1学級の小規模校のE校は、教職員数も少ないことから、教師が複数の校務分掌を担当しなければならない実態がありました。

総合的な学習の時間の担当者を1名おいていましたが、各担任がそれぞれの思いで活動を設定し指導しており、学校として育てたい力がつながっていかないという課題を感じていました。

今年、新しい校長が着任し、全教師が学校の全体計画に則して指導を行う組織づくりを進めることになりました。また、既存の組織を生かしつつ、一人一人が計画、運営に対して役割をもつこととしました。

このことにより、教師同士が活動や指導について相談し合う場面が増え、全教師が学年、学級の壁を越えて、情報交換・実践交流が行われるようになりました。

事例② 大規模校の運営組織の例



全校27学級の大規模校のF校では、各学年により総合的な学習の時間の年間指導計画や単元指導計画が作られ学習活動が推進されていました。

このような実態であるが故に、全体計画との整合性を意識しないで学習が行われたり、異学年(児童・教師)との交流がほとんど計画されなかったりするなどの課題が見られました。

このような課題の解決のため、昨年度、コーディネーターと各学年担当者等が1ヶ月に1度、情報交換・協議を行う「総合的な学習の時間推進委員会」という特設の委員会組織を立ち上げ、総合的な学習の時間をより協同的に行えるよう改善しました。

F校「総合的な学習の時間推進委員会」における主な会議内容

およそ1ヶ月に
一度、開催され
ています

- 総合的な学習の時間の全体計画の作成(改善)
- 各学年の年間指導計画・単元計画の作成(改善)

- 総合的な学習の時間の評価基準の設定
- 評価法(ポートフォリオ、パフォーマンス、自己・相互評価)等の検討

- 教師の指導組織の検討
- 情報交換による共通理解
- 「通信・広報」の編集
- 校内研修の企画



- 適切な体験活動、多様な学習形態の工夫、地域の教材や学習環境の積極的な活用など、実施に向けた調整

- 学習活動に合わせた時間割の工夫
- 各学年の活動場所の調整
- 特別活動担当との調整

- 学校間(近隣小・中学校、姉妹校)の交流の検討
- 校種間(幼稚園、中学校)の連携の検討

- 保護者説明会の企画
- 関係機関との調整
- 施設・人材リストの作成、利用の手引きの作成

- マネジメント・サイクルによる自己評価の実施
- 評価結果による改善策の検討

F校「総合的な学習の時間コーディネーター」の具体的な職務内容

<p>〔指導計画等の作成〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全体計画作成の中心となる ●学年の年間・単元指導計画作成を支援する 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や地域人材の実態・特性を知るため地域巡りや地域の人との交流等を積極的に行った。 ・自校の教育課程・校長の経営方針を熟知するよう努力した。 ・児童・教師・保護者等の思いや願いを理解するよう対話に努めた。 ・総合的な学習の時間についての理解を一層深めるために関連する研究会、研修会等に主体的に参加し自己啓発に努めた。
<p>〔教職員の協働の促進と意欲の向上〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ●校内推進組織を運営する ●情報交換を活性化させる ●校内研究との関連を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な情報交換会を企画・実施した。 ・学年を越えて協同して実施する学習を提案、実施した。 ・各学年の授業の情報を収集し、その取組の良いところを随時、職員会議等で積極的に伝えた。また、「通信・広報」に記載し発行した。 ・若手教師の指導について直接指導助言を行った(OJTの実施)。 ・校内研究等を先導した。また、先進事例等を集め随時報告した。
<p>〔保護者、地域、他校、異校種との連携の推進〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ●連絡会を開催する ●授業公開を実施する ●「通信」を発行する 	<ul style="list-style-type: none"> ・玄関横に保護者・地域向けの掲示板を設置し、写真等による学習状況の報告や協力要請の呼びかけを掲示した。 ・教師がPTA・地域行事、学校公開に出席するよう働きかけた。 ・近隣校の総合的な学習の時間の内容等を自校で定期的に報告した。 ・近隣校中学校との共同校内研究会を開催した。近隣校の総合的な学習の時間にかかわる校内研究会に参加した。
<p>〔指導計画・内容等の評価と改善〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ●活動の成果を検証する ●校内外の評価を実施する 	<ul style="list-style-type: none"> ・全児童のポートフォリオ評価等を実施した。 ・国・自治体実施の学力調査・意識調査との関連を分析し、成果と課題を考察し全教師に紹介した。 ・児童・保護者・地域人材対象の意識調査等を実施した。 ・年2回、指導計画等についての自己評価を実施し改善に結び付けた。

2. 校内研修等の充実

総合的な学習の時間を充実させ、その目標を達成する鍵を握るのは、指導する教師のカリキュラム構想、開発等の力量によるもの大きい。また、総合的な学習の時間は、教師がチームを組んで指導に当たることによって、児童の多様な学習活動に対応できることから、教職員全体の指導力向上を図る必要もある。したがって、すべての学校で年間の職員研修計画の中に、総合的な学習の時間のための校内研修を確実に位置付けることが極めて重要になる。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題に応じて適切に定めていくべきものであるが、まずは、『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』を参考に総合的な学習の時間の趣旨や内容等についての理解を教職員全体で確かにする必要がある。

また、具体的な研修計画を決定する場合は、できる限り実践を進める教師の希望や必要感を生かした方法、内容等を選択する必要がある。

授業研究では、児童が学習に取り組む姿を通して教師の指導について評価し、指導力の向上を図ることが必要である。また、総合的な学習の時間の授業を教師が互いに参観できるような工夫をすることにより、教師同士が学び合える職場風土が生まれたり、日常の授業を通じたOJTに発展していったりする可能性がある。

総合的な学習の時間の校内研修内容・方法例

● 校内研修の内容例

- 総合的な学習の時間の目標、内容、育てようとする資質や能力及び態度の設定について
- 総合的な学習の時間の教育課程における位置付けや各教科、道徳、外国語活動特別活動との関連について
- 全体計画、年間指導計画、単元計画の作成・見直し及び評価について
- 教材開発の在り方や地域素材の生かし方について
- 総合的な学習の時間のためのICTの活用についてなど

● 校内研修の方法例

《校内での研修例》

- グループ研修：指導計画作成や教材づくりの演習、テーマに基づくワークショップなど
- 全体研修：視察報告会、講師を招いての講義など

《校外での研修例》

- 実地体験研修：児童の体験活動の臨地研修とその評価など
 - 教材収集研修：地域の諸事象の観察や調査など
- 〔小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編より〕

総合的な学習の時間を進める中で教師が育つ —OJTの中で高められる教師としての専門性—

計画・準備段階で高められる専門性

- 指導計画を作成する力、授業（学習活動）を構想する力
- 学習指導要領及び学習指導要領解説についての理解
- 児童、地域等について、分析する力、実態把握をする力
- 自校教師、他校教師や地域人材との交渉力、調整力等

学習実施段階で高められる専門性

- 児童の興味を引き出し、個に応じた指導をする力
- 話し合い活動など集団による学習を支援・統制する力
- 学習状況を的確に把握し、授業を進める力、評価する力
- 児童の思いや願いを理解する力
- 他教師、外部人材と協同して指導する力等

事後評価段階で高められる専門性

- 評価規準に照らして児童の達成状況を評価できる力
- 指導計画等の課題を見いだす力、活動の成果を見出せる力
- 指導計画、授業（学習活動）を改善する力等

総合的な学習の時間を充実させるためには、指導計画を策定し、運用する力が必要となります。また、実践に伴って次々と生まれる諸課題を解決する力や地域人材等と調整する力も必要になります。

このことから、日常において総合的な学習の時間の改善努力を行うこと自体がOJTであり、教師としての専門性が磨かれます。ある自治体では、総合的な学習の時間のカリキュラムづくりを小・中学校の若手教師のセンター研修テーマに位置付け、教師としての専門性の向上を図っています。

OJT「On The Job Training」とは

「日常的な職務を通して、必要な知識、技能、意欲等を意図的、計画的、継続的に高めていく取組（人材育成）」

事例 小学校と中学校が定期的に協同で行うワークショップ研修の例

《G 小学校の概要》

- 児童数 357 人、教職員数 22 人
- 学級規模 各学年 2 学級、計 14 学級

《H 中学校の概要》

- 生徒数 290 人、教職員数 26 人
- 学級規模 各学年 3 学級、計 9 学級

- 学校・学区域の特色：小中一貫教育校、政令都市、古くからの商業地（商店街）と周辺の住宅地からなる学区域
- 総合的な学習の時間の主な内容：「地域を愛する心、地域貢献の心と態度をはぐくむ学習」

G 小学校は、大都市の商業地域にある中規模校です。近年、自治体から近隣の H 中学校との小中一貫教育校の指定を受けたが、なかなか小・中学校を共通の理念で貫いた教育課程編成が進まず、苦心していました。また、教師間の交流等も停滞していました。

そのような中、G 小学校の校長は、小・中学校一貫教育の重点的な目的を「9 年間の連続性のある学力向上策の展開」に加え、「市民性の育成に向けた地域にかかわる学習の推進」とすることを H 中学校の校長に提案したのです。協議の結果、「市民性の育成」については、総合的な学習の時間を中心に、社会科、道徳、特別活動を関連させ進めることとなりました。

そして、両校の校長は、小学校と中学校の教師間の交流の活性化を期待して、研究主任、総合的な学習の時間コーディネーターに、交流のしやすさや必然性から、「総合的な学習の時間の単元づくり」を内容とした小・中学校全教師参加によるワークショップ型研修の実現に向けた調整等を行うように命じたのです。研修会の経過と研修の内容については以下のとおりです。

研修会の準備から実施までの経過と研修の内容

月 日	会 議	協議、検討内容・研修内容
4/15	第 1 回合同研修会 (全体会)	<ul style="list-style-type: none"> ● H 中学校を会場として実施する。 ● H 中学校研究主任から「市民性のとらえ方」、育てたい児童・生徒像、推進組織、研修計画等を説明。 ● 総合的な学習の時間についての新学習指導要領の理解を行う。 ● 自己紹介後、ワークショップのグループづくりを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 9 グループを編成する。（1 グループ 5 人又は 6 人） ・ すべてのグループは、所属学年、校種、経験等の偏りがないように編成する。 ・ 各グループに必ずまとめ役となる研究推進委員が入る。
8/9	第 2 回合同研修会 「地域素材発掘ワークショップ」	<ul style="list-style-type: none"> ● G 小学校を会場として実施する。 ● ワークショップの進行は外部講師（大学教授）を招聘する。 ● グループごとにワークショップを行う。2 つの教室を使用する。 ● 各グループは、地域マップを広げ、「市民性」をはぐくむための地域素材について話し合うとともに、その素材をどの学年の何の学習活動で活用できるか、具体的な単元計画を作成し、プレゼンにまとめる。 ● 資料完成後、全グループが多目的室に集まり、報告を行う。 ● 研修会終了後、研究推進委員が集まり、本日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。
11/8	第 3 回合同研修会 「授業研究ワークショップ①」	<ul style="list-style-type: none"> ● H 中学校を会場として実施する。 ● 「地域の素材発掘ワークショップ」で発表された学習活動についての研究授業を実施する。 ● 研究授業終了後、各グループに分かれ、本日の研究授業の単元・学習活動をさらによくするための改善方法・内容について話し合う。 ● 各グループでの話し合い終了後、各グループから報告を行う。 ● 今回も研修会終了後、研究推進委員が集まり、本日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。
2/8	第 4 回合同研修会 「授業研究ワークショップ②」	<ul style="list-style-type: none"> ● G 小学校を会場として実施する。 ● 「授業研究ワークショップ①」とほぼ同じ進め方で実施する。

